

賀茂季鷹の人と作品

盛田 帝子先生

平成 23 年 10 月 30 日 於上賀茂神社庁屋

(司会)

それではこれから今日の講演、盛田帝子先生のご講演をお願いいたします。講演にあたりまして、ご略歴を紹介させていただきます。先生は九州大学大学院博士後期課程修了でございます。博士(文学)、いわゆる文学博士でございます。大学院修了後、日本学術振興会特別研究員を経て、現在、大阪の相愛大学講師をなさっておられます。先生は平成 15 年、第 29 回日本古典文学会賞をご受賞になっておられます。これは、「光格天皇と宮廷歌会—寛政期を例に」など一連の研究に対して受賞されておられます。それから、若干論文を紹介いたします。「賀茂季鷹の生立ちと諸大夫時代」(『語文研究』、86・87、平成 9 年)、これは学振時代の研究でございます。その他、「江戸和学史への一視点—荷田御風と賀茂季鷹」(『雅俗』、5、平成 10 年)、それから「少年期在京時代の賀茂季鷹—初期詠草とその周辺—」(『雅俗』、8、平成 13 年)、「賀茂季鷹の能宣歌誤写説—文化十年石清水臨時祭再興逸事—」(『国文学論叢』、9、平成 14 年)、これは今日のお話にも出てくると思いますが、そういう論文ほか、多数ございます。特に、今日は季鷹の話をしていただきますので、季鷹関係の論文を挙げていただきました。私が名前を知らなかったので調べましたら、荷田御風^{かだののりかぜ}という方は江戸中期の国学者で、伏見の神官の関係の方です。能宣^{おののかつみ}という方は大中臣能宣で平安時代の歌人で三十六歌仙の一人で、神宮の祭祀もなされております。詳しくはこれからのご講演に期待したいと思います。それでは先生、お願い致します。

こんにちは、今ご紹介にあずかりました盛田と申します。どうぞよろしくお願い致します。賀茂季鷹は、今からだいたい 200 年くらい前、江戸時代の中期に大変活躍いたしました。京の上賀茂の地にありながら、江戸でも大阪でも歌壇史を変えるような大変大きな働きをしました。当時は日本全国の人々がこの上賀茂の雲錦亭^{うんきんてい}という季鷹の別邸に訪ねてきています。本居宣長もここに来ておりますし、大分の女流歌人で夫の許しを得て季鷹のところまで勉強に来ている女性歌人もおりますし、とにかく当時の文学者に大きな影響を与えた季鷹について、今日は 60 分くらいでということでごくごく基本のお話をいたします。

最初に、こちらに飾ってあります山本家に所蔵されております季鷹の肖像画について紹介します。次に、季鷹の高弟だった松田直兄^{まつたのちかえ}が季鷹の墓碑銘を書いています。その墓碑銘から季鷹の人となりを紹介します。最後に、こちらに展示して下さっています季鷹の狂歌でありますとか、和歌について簡単に説明いたします。

それでは、資料を一枚配っておりますけれども、それをご参照いただきながら話を聞いていただければと思います。

まず、資料の一枚目なのですが、上の段のところに山本家のご所蔵の肖像画の写真を挙げております。これは、山脇東暉^{やまわきとうき}という、松村月溪^{まつむらつきせき}という有名な江戸中・後期の四条派の絵を描く画師の門人であった人ですが、この人が季鷹の肖像画を大変正確に描いております。こちらにあるのがその本物ということになるのですが、なかなか普段は見られないものですので後でゆっくりとご覧頂ければと思います。肖像画を見て頂きますと、べんがら色地で、花菱と菊文様の狩衣を着け、薄花色の指貫を穿いて、そして烏帽子を着けまして40歳～60歳くらいの季鷹像が描かれております。国会図書館にも肖像画がありますが、これは80歳くらいの季鷹晩年の画になっております。山本家ご所蔵の肖像画をみると、画の上のほうに白と朱の二枚の色変わり色紙があります。白のほうは、季鷹の吉野山の桜を詠んだ歌が自筆で書かれております。左の朱い方は、竜田山の紅葉の歌が季鷹の自筆で書かれております。社家町にあります季鷹の別邸の雲錦亭に吉野山から桜を、竜田から紅葉を移植しております。古今集仮名序で雲に例えられる桜、錦に例えられる紅葉が、「雲錦」という亭号のもとになったのですね。季鷹は『古今集』の「仮名序」に出てくる吉野の桜と竜田山の紅葉を実際に自分の庭に植えることによって、古今集仮名序の世界を庭に見える様に再現したのですね。雲錦亭ができて約200年、現在もほぼそのまま残っております。この雲錦亭の雲錦は季鷹の号にもなります。そのように自分の文学者としての生き方の理想（仮名序の世界）を、住んでいるところや肖像画、家の宝として遺して置こうと思った物などに「雲錦」として書きつけてゆくのですね。そのような意味をもつ貴重なものですので、どうぞご覧になってください。

次に、賀茂季鷹の墓碑銘（お墓に彫られた季鷹の生涯に関する文章）をごらんください。お墓は西賀茂にございます。お墓の正面には「前一老～」と彫っております。前一老というのは名前の頭につけるめったにないものなのですが、これは当時の県主の中でも長老格の人で大変業績があり、名前を知られていた人のみに贈られる称号であるというように伺っております。「前一老」がありまして季鷹の官職（「安房守正四位下」）がありまして、名前（「賀茂季鷹県主」）がある、というようになります。そして和歌の三面に松田直兄という季鷹の門人が書いた碑文が刻まれております。松田直兄という人は季鷹の一番弟子でありながら、自分も本屋さんから自著を出版するほど国学者・歌人として力量のあった人ですが、季鷹の秘書としての仕事もしていたのですね。事務能力がある人で、例えば私が持っております書簡には、季鷹が摂関家の近衛家にあがるときに、この松田直兄が近衛家の係の人と交渉して、対面する日取りを決めまして、季鷹が行く、というようなことが書かれております。もう一通の別の手紙には富小路貞直というお公家さんが、季鷹に扇面を書いてくれるようにというお願いをしておりますけれども、その仲介をしたのも松田直兄でありました。その直兄が書いた碑文をゆっくりですが読んでみたいと思います。

「三十八歳春に賀茂に還りて」とあります。これは季鷹が三十八歳の時ですが、それまで季鷹は江戸に行って勉強しておりましたが、父季栄が亡くなって跡を継ぐために三十八歳の時に江戸から上賀茂に帰ってくるのですね。そして、「専ら社頭に奉仕す」とあります。

上賀茂神社にお仕えしたということが書かれています。「さて、御手洗川の後瀬清き地に」これは雲錦亭のことですが、「吉野・立田の花紅葉を移し植えて、別荘を営み、雲錦亭と称す」先ほど紹介いたしましたように今の山本さんのご自宅があるところに吉野の桜と竜田の紅葉を植えて雲錦亭と名前を付けて住んだ、ということが直兄の文章からもわかります。そしてさらに「また、歌仙堂を造り、山柿の像を祀り」とあります。ここに歌仙堂という言葉が出てきましたけれども、これは五十八歳のときに造った祠になります。季鷹は国学者・歌人としてたくさんの歌を作っておりますので、自身が歌の神様を祀る祠を雲錦亭の庭の中に造ったのです。これは当時のまま今も残っておりますけれども、歌仙堂の中に、碑文にあります「山柿の像」つまり万葉集の歌人として有名な柿本人麻呂と山部赤人の木像を祀っております。三月の十八日は柿本人麻呂が亡くなった日とされておりまして特別な日です。この日は宮中でも天皇が主宰して歌会が行われまして、そして、人麻呂に歌を奉納するわけですが、季鷹も雲錦亭で三月十八日に歌会をやって、人麻呂と赤人が、万葉歌人が祀ってある歌仙堂に歌を奉納するという歌会をやっていたことがわかっています。宮中よりは規模が小さいけれども同じような儀式を季鷹が行っていたことがわかります。

さて「傍らに文庫を建て、倭漢の書籍数千巻を蔵す」とあります。この歌仙堂の近くに文庫を建てて、数千巻の蔵書をそこに所蔵していた、ということになります。数千巻の蔵書とありますが、季鷹はこの蔵書を使ってさまざまな考証をし、世の中の役にもたてていました。例えば光格天皇が直々に仲介者を立てて宮中の儀式を再興するときに季鷹に考証をお願いしていたことが知られています。蔵書の内容については、「其の書悉く校正して」とあります。これはテキストを正しくして、ということです。本を買ったらそのままにしておかずに、よりよいテキスト、本文になるようにいろいろな本を比較して朱で正していきます。これをほとんどの本に季鷹は行ったことがわかっております。そして「頭に傍らに朱を加え給はるも、雲の如く、錦に似たり」ここは直兄の大変美しい文学的な表現ですが、本の頭注、それから傍らに考証した季鷹の字は大変美しく、まるで雲のようである、錦のようである、というように書いてあります。「然れば」そうであるので、「天雲のいよいよ高き御方よりも」これがおそらく宮中の人だと思われまふ。「此の文庫中に在るを証本に借用し給ひ」この季鷹の文庫の中にあるものを証拠となる書籍としてお借りになった、ということになります。このように国学者としても歌人としても、宮中の人々をはじめ多くの人に認められ、頼りにされていたのが季鷹でした。

碑文とは別に、もう一つ季鷹の人となりを表すエピソードとして、今日ご紹介しておきたいのは、「②国学者としての季鷹」です。読みますと、「文化十年」これは季鷹が六十歳のときに、時の天皇、光格天皇が、石清水臨時再興祭、長く行われていなかった石清水臨時祭を再興しようという話が出ました。その儀式のときに用いる東遊歌というのがあります。この東遊歌にはもともとあった古い歌（神様に自分たちの思いを通じさせるための古歌）を使えばいいのか、もしくは新たに自分たちが創作して、自分たちの言葉で作って歌

を詠むのがいいのかということが、伝統が途絶えておりましたのでわからないということで、季鷹におたずねがありました。もちろん直接というわけではなくて、公卿の^{ひろはし}廣橋胤定という人を仲介にして光格天皇から季鷹は意見を求められています。季鷹はいろいろと考証をしまして、次のように答えました。「古歌」、つまりそこに挙げておりますように三十六歌仙の能宣の歌「君かよにみなそこすめるいはしみつなかれてちよにつかへまつらん」という歌を用いると答えます、この歌は「とてもお栄えになっている天皇の御代に、水の底まで澄み切ったその石清水の清らかな流れがいつまでも続くように、いつまでも私どもはお仕え申し上げます」という歌なのですが、それを東遊歌に用いるように回答したのです。そして、その能宣歌は今使われているのは本文が間違っていますので正しくして、新しい本文を回答いたします、としてプリントに書いてあります歌を光格天皇に提出するわけです。間違った本文としてどのようなものが当時流行していたかということ、「流れ『て』」とあるのが正しい本文なのですが、くずし字にしたときに「て」の字を「を」の字に誤写してしまい、それが流布していたために、間違った本文になっていたのを季鷹は考証して「流れて」と正しているのですね。その回答をおききになった光格天皇が感じ入られまして、そして、その考証のすばらしさを賞して感状を賜うことになります。これが直兄の碑文にも書いてあるわけなのですが、他に大阪の方がお持ちの季鷹の書簡にも同じ記事が出て参ります。季鷹がさらにお公家さんの飛鳥井家と綾小路家の蔵書『三十六人家集』を見てこれが正しい本文であるということをきちんと考証したことが記されています。

このように、当時の宮中の儀式のために考証ができるほどの実力を持った国学者として知られていたということを、季鷹の人物像として紹介しておきたいと思います。

ここまで季鷹の人物像を紹介してきました。では、季鷹自身は創作者としてどのような作品を遺したのでしょうか。これまでの話の流れですと、すごく偉い人で近寄りがたい感じもしますが、季鷹らしい歌ということで、「2 季鷹の作品（1）和歌」の一番をご覧ください。詠みますと、「又の夜、犬のいたく鳴きしが、怪しさに朝とく出でて見れば、後園に作りし大根の葉を、みながら喰ひ果てたる、此の^{なり}辺の人に問へば、「鹿の仕業なり」と云へば、妻恋ふにあはれと思ひし^{こしか}小牡鹿も今朝はた憎し如何にかもせん」と、もう笑っておられる方もいらっしゃると思いますが、とても季鷹らしい歌ですね。詞書きからみていきます。まさに場所はここ、上賀茂の地です。「又の夜」この上賀茂で、この頃秋深くなってきて妻を恋うて鹿が鳴っていたのですが、ある日の夜に「犬がいたく鳴きしが」犬がひどく鳴っていて、季鷹はなんとなく怪しいなと思っていたけれども、「怪しさに朝とく出でて見れば」朝に早く起きて外にでてみると、「後園に作りし大根の葉を」季鷹の家の後ろの庭に大切に作っていた大根の葉っぱを、何者かが「みながら喰ひ果てたる」残らず食べてしまっている。季鷹も驚くわけです。せっかく一生懸命作っていたのに、もうすぐ収穫と思っていたのに全部葉っぱがなくなっています。これだと育ちませんよね。「このあたりの人に問へば」近所の人に聞くと、「鹿の仕業なり」と云へば「鹿の仕業ですよ」と言ったので、そこで季鷹が歌を感極まって詠むわけですね。「妻恋ふにあはれと思ひし小牡鹿も」昨夜妻を恋い慕って

鳴いているのを哀れだな、情緒があるなとしみじみ季鷹は聞いていたのに、その小牡鹿も「今朝はた憎し」今朝は本当に憎くて憎くてしょうがない、というわけですね。大切に育てていた大根をすっかり食べられてしまった。「如何にかもせん」いったいどのようにして鹿をやっつけてやろうか、というふうにくたっているわけです。大変な怒りの歌、字義通りとってしまうとそうなのですが、実は季鷹は怒ってはいるのですが、真から怒っているのではなく、自分もこれだけ大根が好きで一生懸命育ててきた。人間だって秋は色気よりは食い気である。鹿もきつと妻を呼ぶ色気よりも食い気に勝てずに大根の葉を食べてしまったのだろうか、という鹿に対する共感、そこからわきあがってくるおかしさや滑稽さをこの和歌は表現しています。季鷹の人柄があらわれている歌ですね。

それから次に正統的な和歌、お公家さんの堂上風の和歌があります。普通は正風体しょうふうていという正統的な二條派の和歌を詠むか、もしくは狂歌師としておもしろおかしい歌だけを詠むかどちらかに分かれてしまうのですが、季鷹の場合は先ほどの鹿の歌のような中間的な、滑稽な歌風もあります。季鷹は和歌も詠めるし、実は狂歌も詠める、その中間の歌風も読める何でもできるオールマイティーな人だった、ということで、最初にこの和歌と狂歌の中間の和歌を紹介いたしました。

次に、狂歌、おもしろおかしい歌、笑いを狙った歌というのを少しみていきます。プリントの「(2) 狂歌」をご覧ください。そこに、賀茂季鷹の『狂歌云禁集』、タイトルは狂歌うたかたを作っていることを言ったらいけないよ、というものなのですね。私が狂歌を詠んでるということを言わないでくださいね、という狂歌集なのです。古来狂歌師は、今のように、文字にして狂歌の記録を残しません。詠み捨てと言います。おかしいことを言って、その場で笑ってぱっと捨ててしまう、流してしまうのです。それが狂歌としての本流ですから、その歌を残して行くというのは照れがあって、この歌集のタイトルをつけているのです。けれども狂歌を遺しているのが季鷹らしいところなのですけれども。この『狂歌云禁集』は世界に一つしかありません。聖心女子大学にあるのですが、調べると出版して本にしようとしていた形跡があります。しかし実際は出版されずにそのまま今聖心女子大学に遺されている、ということになります。プリントを見て頂きたいのですが、絵文字が右側にあります。左側に、写真に挙げたような「首長く口ばしながくあし長くよはひも長くよくそろひ鶴 雲錦戯画賛」とあります。雲錦は季鷹の号ですから、私がふざけて書いた歌です、ということで、首が長くてくちばしも長くて足も長くて齢も長くて、つまり長生きして、何でもかんでもよく揃っている、という狂歌なのですが、実はこれ謎解きになっていまして、右に書いてある絵文字、これは掛けことばになっていますが、二つの意味が掛けてあります。何と何かおわかりでしょうか。なぞなぞ、クイズのようなものですが、二つにかかっています。おわかりの方、どなたかいらっしゃいますでしょうか。歌がヒントになっていますけれども。右のほうを見て頂きますと、「長」という文字のくずしなのですね。長いという字、絵は鶴です。鶴は千年亀は万年という、鶴がかかっているわけです。「鶴」の絵と「長寿」の長いという文字がかかっている、文字絵といいますが、おめでたい物を

まず巻頭に置いて狂歌集をはじめているわけですね。

季鷹は百歳まで生きるのが目標でした。実際は八十八歳までしか生きられなかったわけですが、鶴は大変おめでたい、千年まで生きる寿命の長いものですから、それを長命の長い、をかけて、季鷹は文字絵を書いたわけです。そしてこの狂歌、鶴は首が長くてくちばしも長くて足も長くて、しかも寿命も長い、大変よく揃った鳥だ、という狂歌を書いたわけです。

上賀茂神社に荊木さんが奉納された狂歌の屏風があります。後でまたご覧頂ければ、季鷹の達筆ぶりもわかるのですが、この屏風の一番左側に、同じ狂歌が書いてあります。注目していただきたいのは、一番下側に季鷹という名ではなく、「長命」という季鷹の戯号が書いてあることです。実はこれは季鷹が狂歌を作るときのペンネームなのです。これも実は掛け言葉になっておりまして、おわかりの方もいらっしゃると思いますけれども、方丈記などで有名な下鴨の鴨長明、季鷹はもちろんよく知っていますから、その有名な歌人であった鴨「長明」と「長命」（私は長く生きるんだという長命）を掛けて、狂歌を作るときのペンネームにしているのですね。ぜひゆっくりご覧になってください。

せっかく出してくださっていますので、荊木さんの屏風を少し説明したいと思います。荊木さんから資料をお借りして調べたのですが、明治の初めに、あるお公家さんが荊木さんのおじいさまに当たる方に、この屏風をお譲りになったということです。それはなぜかと申しますと、狂歌を荊木さんのおじいさまが詠んでいらっしゃって、この季鷹の狂歌がすばらしくて欲しい、ということで、今のお金に換算して三百四十万円くらいで譲っていただいたということで、大切に保管してあったそうです。重要なのはこれをお公家さんが持っていたという情報でして、普通、お公家さんは和歌は詠みますけれども、狂歌を詠むことはあまりないのですね。地下の季鷹の狂歌の屏風を飾って置くほどのお公家さんというのは公には知られていないわけです。ところが、季鷹が遊びで詠んでいた狂歌を屏風に仕立ててもらって、きちんと表装して飾っていたということは、一つはそのお公家さんが季鷹にかなり心酔していた人物であったということが考えられます。そうしますと、一つ考えられるのは、先ほど名前を出しました光格天皇の時に活躍していた富小路貞直というお公家さんです。光格天皇の時代、歌学復古（和歌を古の風にかえそう）がブームになります。文献実証主義が浸透していくのですね。その中で季鷹は京都で人々を牽引する存在の一人でした。この歌学復古運動の中には、光格天皇の実のお兄さんにあたる妙法院の宮さまをはじめ、季鷹や富小路貞直もいました。普通は身分があっても実際は直接同等には接することができないのですが、妙法院の中では季鷹、貞直、いろいろな人々が対面して一緒に歌を詠んでいるとても特殊な状況ができあがっています。そこで季鷹に大変心酔して歌や狂歌や国学の影響を受けていたのが富小路貞直です。季鷹は富小路貞直から猫の赤ちゃんをもらっていて、歌を詠んでいるのですが、大変ありがたいので地べたには絶対おかずに天井にあげて育てたと詠んでいます。それほど仲がいいわけですね。上下の身分であるとかジャンルをとっばらったところで一緒に学問をやっているという意識が在った人で

す。ですので、おそらく富小路家、もしくは富小路貞直と同じ意識をもった人の家から出てきたのではないかと現在のところ考えています。

次に、市忠頭さんご所蔵の屏風です。こちらも大変達筆で、見所は季鷹の号の部分です。もちろん和歌なので名は漢字で書いておりますけれども、すごく凝っているいろいろな漢字を当てて書いてあります。また、一月から十二月までひと月につき一首づつ書いてありますが、注目していただきたいのが三月のところ。「花雲に似る」という題で歌が一首書かれています。これが先に紹介しました季鷹の肖像画にある白い色紙の吉野山の桜の歌と同じなのです。そして九月のところには「浅く深き」とありまして、立田の紅葉の歌があります。これも肖像画の紅葉の歌と同じです。市さんがお持ちの屏風には、自分の自画賛として自負していた歌、雲錦亭の象徴になると思っていた歌二首が入っているわけです。ですので力をいれて書いたものの一つであるということがわかると思います。

そして、こちらに上賀茂神社に奉納された十二ヶ月の屏風があります。こちらもまた筆致に勢いがあるとおもしろいのですが、こちらには官職と位が書いてあります。正式な形で書いてあります。和歌には万葉仮名で筆を少し変え、勢いよく書いてあるもの、散らし書きにしてあるものもあります。和歌の書き方、見せ方というのもすごくセンスのいいものなので、そちらもご覧いただければと思います。そして、市さんご所蔵の屏風と上賀茂神社ご所蔵の屏風とを比較すると、五首くらい重なっています。これはなぜかと言いますと、自分の自負していた歌を重ねて書いているということなのですね。ですので、その部分も意識して見ていただければと思います。

さてプリントにかえります。最後に、季鷹の堂上風の歌を一首だけ紹介して終りにしたいと思います。「3、[賀茂季鷹十二か月和歌屏風]より」のところをご覧ください。これは季鷹の歌集『雲錦翁家集』にも出てくる季鷹の自負していた歌です。

まず本文を読みます。「山家の夜の雪」という題で「季鷹」とありまして、「軒近^{のまうかまかひ} 算の水はおと絶て ゆきに声有^{あり}夜半^{よは}の山里」という歌になります。大変静かな江戸時代の冬の夜を思い浮かべてください。季鷹は上賀茂神社の摂社と言われていた貴船社に宿直しています。そして宿直するときに仕事が終わると、夜にろうそくの明かりで勉強します。一晚掛けて一冊本を写したとか、今晚は三分の二までだった、というようなことを奥書に書いています。ここでは歌を詠んだのですね。ちょうどこの日はすごく雨が降っていたようです。最初は雪が降っていなかったのだけれども、宿直しているうちに、本を写していたかも知れないですし、勉強していたのだと思いますけれども、雨が雪に変わったようです。訳しますと、「軒近算の水はおと絶て」、季鷹の宿直している家屋の軒に近い算の水の音は、いつの間にか降り始めた雪に埋もれてしまって音が止んでしまった、というわけですね。軒に近いところでずっと算に水が流れている音が聞こえていたのに、いつの間にか音が絶えていた。それは雪に算が埋もれたからだ、というわけです。そして下の句ですけれども「ゆきに声有夜半の山里」。その軒からは積もった雪が時々ずり落ちるのでずっ、ずっ、と音がするわけですね。その音が雨水が流れている音の代わりに聞こえてくるという歌にな

ります。大変技巧的な歌で、見ることつまり視覚に頼って作った歌ではなくて、音だけ、さえた聴覚だけで本質を捉えて詠んでいる歌で、大変技巧的な歌であるということがわかります。箆を水が流れている音とそれから雪がずり落ちる音が対比的に捉えられて上の句と下の句に配置されています。貴船の冬の夜の静けさが浮かび上がってきます。とても繊細で技巧的な堂上風の詠みぶりがみられます。

では、季鷹はなぜこんなに技巧的な堂上風の歌を詠めたのだろうか、ということなのですが、当時天皇に歌を教えた歌道宗匠有栖川宮職仁親王に学んだのです。上賀茂社にお仕えしながら、有栖川宮家に侍として、最終的には諸大夫としてお仕えしています。このとき十二歳でした。今でいえば小学校六年生ですので大変幼いときに行くのですが、職仁親王の王子に季鷹の一才下にあたる織仁親王という方がおいでで、おそらくご学友のような形で一緒に学問や歌を学んだのだと思われます。季鷹はもともとかなり早熟な少年だったのですが、お仕えしながら実務的にもどんどん実力を付けていきます。十一歳にはすでに諸大夫になっているのですが、普通は三十代とか、遅い人では四十代くらいでそのように仕えているのですが、その方々に混ざって十二歳の季鷹は職仁親王の右腕となって歌集の編纂などもやっています。このような記録からも、本当に幼い時から才能にあふれた人だったことがわかります。有栖川宮職仁親王という方は、実は江戸時代の堂上和歌の根幹になる、古今集の秘伝などを含んだ御所伝受の保持者でした。御所伝受は選ばれた実力のある人だけに伝えられるものです。その職仁親王から季鷹はすごくかわいがられて十二歳のときから和歌の訓練を受けて、門人格として育ててゆくわけです。それで堂上風の和歌もきちんと詠めるし、歌学の基礎もあり、狂歌も詠め、国学も、書も、何でもできるマルチな才人になった、ということが言えると思います。以上、簡単ではございますが、「賀茂季鷹の人と作品」のお話を終えたいと思います。

どうぞご静聴ありがとうございました。

こちらに大変貴重な寂源の屏風もありますので、こちらをご紹介します。「松」という題で詠まれた漢詩になっています。寂源は、後水尾天皇のときに書博士の名前を賜った大師流の能書家の藤木敦直の四男ということになります。出家して比叡山に入り、寂源と名前を付けまして、そのあと筑後に行きまして、高良山というところの座主になって、最終的に京都の鷹峯に戻って参りまして六十七歳の生涯を閉じた人です。なかなかこちらの寂源の書は見られないということですので、どうぞご覧になってください。

そしてもう一点、こちらに色紙があります。折本の装丁になっています。表紙の見返し部分に、絹が張ってありますが、桜と紅葉模様があります。これはさきほど申し上げた吉野の桜と立田の紅葉の雲錦模様になります。季鷹の作品ということで、季鷹のトレードマークである「雲錦」模様で装丁したのですね。色紙の字はすごく丹念に時間を掛けて書いてある字になります。屏風の字と比較しながらご覧になるとおもしろいと思います。やはり色紙の模様も雲錦模様になっております。三枚目の色紙は有栖川宮職仁親王に初めてお

仕えてから、歌を何十年も作っているのだけれども、名歌というような歌をまだ残せていないでいる、という自分の歌人としての気持ちを述懐した歌です。どうぞご覧になってください。

(質問) お話のなかに大師流、また有栖川流などの流派がありますが、季鷹流というか、季鷹の字流について教えていただけますか。

大師流というのは当時の江戸時代のお公家さんを含めて一番主流な書き方です。有栖川流は有栖川宮職仁親王が創始されました。入木道というのがありまして、体得した人に、古今伝受と同じように免許皆伝をします。そうするとその人が字を書いていく、ということになります。これが正式な弟子であり、本流ということになります。季鷹の字はご覧になると、現在のところ有栖川宮さんと似ていません。季鷹は季鷹の字です。この字がいいといって今でも仰る方もいますし、好き嫌いがあると思うのですが、この字は当時とても人気があって季鷹流だと。ただ季鷹は書家として弟子をとっていませんし、論めいたこと、書論めいたものを弟子に伝えた形跡もありませんので、季鷹は季鷹だけで独立している字だというように思われたらいいと思います。

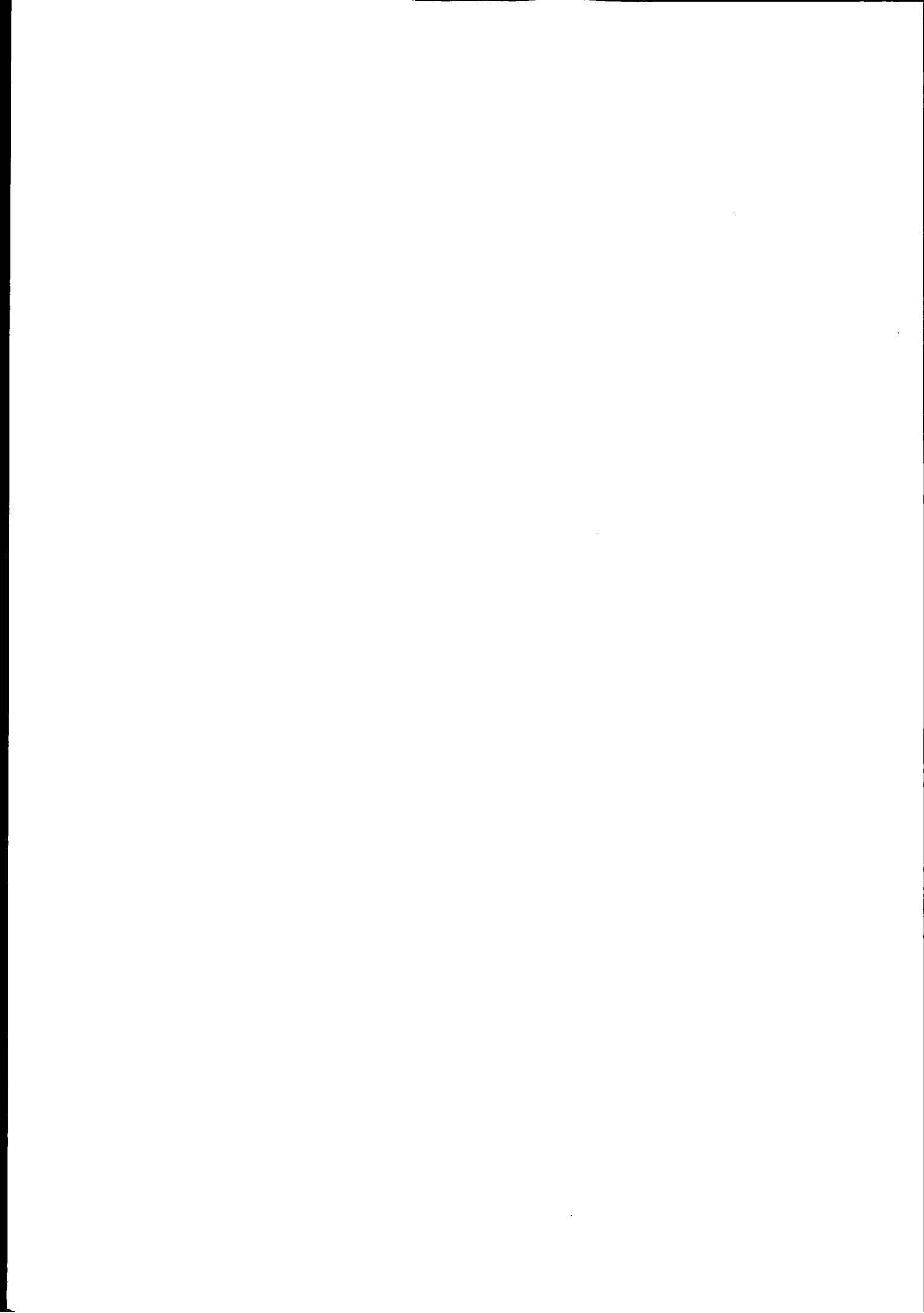
(質問) 誰かに習うということはあったのでしょうか。

季鷹の字で一番早い例で十四歳の字があります。それを見ますと、これまでご覧になった季鷹の字とは全く違います。本当にきれいに一字一字を楷書で書いたような端正できれいな字です。そこからどんどん変遷していきます。私が把握しているのは、季鷹は生涯で五つくらい書体があります。時代で変わっているだけではなく、色紙に書く、大きい物に書く、本の注釈書を書く、それぞれに書体を変えています。ただ、私達が今みて季鷹だと字だと思う代表的な書体は今御覧いただいている書体です。現在のところ、季鷹が誰かに特別に書を習ったとか、入門したという記録は出てきておりません。書体は独自に体得・変遷したものだったのでしょう。

これは賀茂競馬のことを書いたものですが、これは確か天保年間、季鷹の晩年に、競馬の時に棧敷をとって、そこに座って詠んだ歌です。実際随筆にも出てきますけれども、飲食しながら詠んでいます。

競馬 おそくときあがきも あれど且つは乗る人の こゝろの駒くらべなる 季鷹
「遅い馬もいれば速い馬もいるけれど、一方では馬に乗っている人の心の競い合いでもある、そんな競べ馬であるよ」。乗り手の心情に着目してうまく情景を描き出しています。どうぞゆっくりご覧ください。

(司会) どうもありがとうございました。もう一度盛大な拍手をお願い致します。

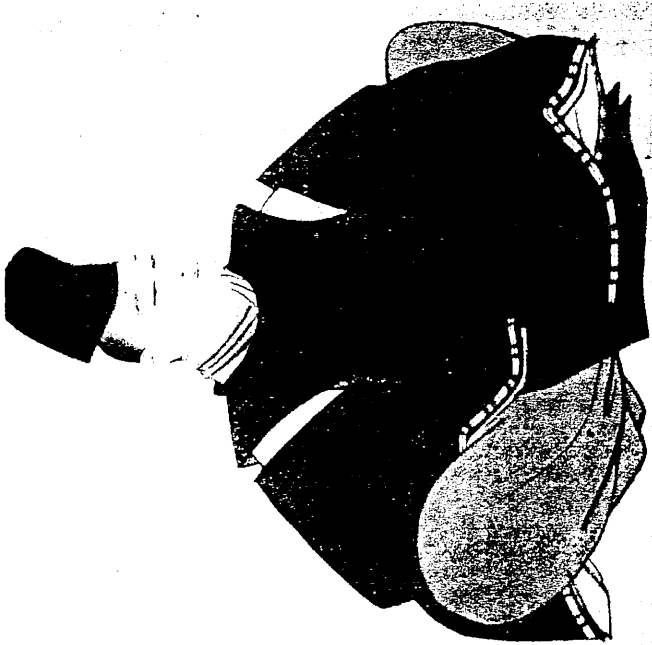


賀茂季鷹の人と作品

相愛大学 盛田帝子

1、賀茂季鷹

(1) 山本家御所蔵季鷹肖像画 (山脇東暉画)



(2) 賀茂季鷹の墓碑銘 (京都府北区西賀茂鎮守庵町小谷墓地)

○墓 正面に「前一老安房守正四位下賀茂季鷹真主之墓」とあり、墓碑の三面に季鷹の門人松田直兄の記した碑文が刻まれている。

○碑文 (抜粋) ①三十八歳春還賀茂、専社頭齋奉仕。扱、御手洗川乃後瀬漕幾地爾、吉野立田之花紅葉移植而、營別荘、稱雲錦亭。又、造歌仙堂、祠山柿像、傍爾並建文庫、倭漢之書籍數十卷乎藏。其書悉校正志云、頭二傍爾加朱給倍流毛、如雲、似錦。然禮者、天雲之彌高支御方余理毛、此文庫中爾在乎證本爾借用給比 (中略) ②文化十年、石清水臨時祭再興之御時、可令諷賜能宥朝臣乃哥錯亂多留乎、上卿広橋從一位胤定卿豫理仰事承云、熟考上聞給倍留善可歌道榮明堪賞。普告世間、可伝子孫云云。感状賜比 (下略)

①雲錦亭：三十八歳江戸から京上賀茂に帰り、上賀茂神社に仕え、寛政十三年十二月二十日あまり、別荘雲錦亭に移り住む。雲錦亭は上賀茂神社から流れ込む御手洗川を邸内に引き入れ、吉野山の桜と龍田山の紅葉を移植し、柿本人麿と山部赤人の像を祭った歌仙堂を建て (文化八年三月十八日)、和漢の書籍数十卷 (季鷹の校合済み多し) を收藏した文庫を建てた。雲錦亭は古今集仮名序の世界を顕在化した別荘だった。

※〔参考〕拙稿「賀茂季鷹と雲錦亭」 (日本古典文学会々報 第二三六号、二〇〇四年七月、財団法人日本古典文学会)

②国学者としての季鷹：文化十年 (一八一三) 石清水臨時祭再興の儀式の時に用いる東遊歌は、古歌を用いるのが、それとも新たに歌を詠むのかということと、広橋胤定を仲介にして光格天皇から意見を求められる。季鷹は古歌 (能直歌「君かよにみなそこすめるいはしみつなかれてちよにつかへまつらん」) を用いるとし、さらに能直

歌の誤写されて伝わった本文を正して回答し、光格天皇から、その考証を賞して感状を与えられる。この後、堂上の飛鳥井家、綾小路家の蔵書『三十六人家集』を見て季鷹説と同じであった事を記している。

※〔参考〕拙稿「賀茂季鷹の能景歌誤写説―文化十年石清水臨時祭再興逸事―」『国文学論叢』第九号（二〇〇二年十一月、京都大学大学院文学研究科国語学国文学研究室）。

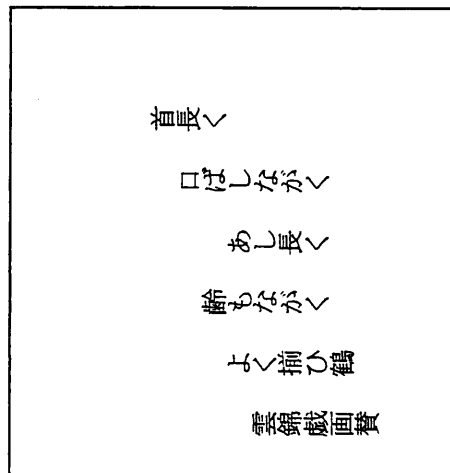
2、季鷹の作品

(1) 和歌

又の夜、犬のいたく鳴きしが、怪しさに朝とく出でて見れば、後園に作りし大根の葉を、みながら喰ひ果したる、此の辺の人に問へば、「鹿の仕業なり」と云へば、
妻恋ふにあはれと思ひし小牡鹿も今朝はた憎し如何にかもせん

(2) 狂歌

賀茂季鷹『狂歌云禁集』（聖心女子大学図書館所蔵）より。



○上賀茂神社奉納〔賀茂季鷹筆狂歌屏風〕

長 首長く口ばしながくあし長くよはひも長くよくそろひ鶴 長命

3、〔賀茂季鷹十二か月和歌屏風〕より

(1) 上賀茂神社所蔵〔賀茂季鷹十二か月和歌屏風〕

出家夜雪 季鷹

軒近 寔の水はおと絶て ゆきに声有夜半の山里

(2) 市忠願氏御所蔵賀茂季鷹十二か月和歌屏風

出家夜雪 軒近幾寔乃水盤／於止絶天／遊起耳聲有夜半乃山斜登 未 喬